

# 横浜国立大学の国際戦略を考えていくにあたって

## ＜アジア工科大学院での経験を思い返して＞

中村文彦（国際戦略推進機構長・ 国際・地域・広報担当理事）

2015 年の 4 月から担当理事になった中村文彦と申します。

私は、1995 年 4 月に横浜国立大学に着任しましたが、その少し前になりますが、1992 年から 2 年間、タイ王国のバンコク都の北側にあるパトンタニ県にあるアジア工科大学院で教鞭をとっていました。その 2 年間の経験、そして、横浜国立大学に来てからの特に最初の数年の経験、これらは、私が国際戦略というものを考えるときの土台になっていると思います。そこで、本稿では、その 2 年間の経験を中心に記述しようと思います。

アジア工科大学院 Asian Institute of Technology は 1959 年に SEATO の大学院として設立されたもので、アジア地域の頭脳流出を防ぐために、欧米等先進国の大学教員がアジアに交代で教えに行くというものでした。当時もっとも政情の安定していたバンコクにあるタマサート大学のキャンパス内に設置され、1973 年に現在の場所、バンコクの都心から約 40km 北のキャンパスに移転しました。タイ王室から用地を提供いただいたときいています。

私が赴任したころのアジア工科大学院は、その歴史の中で、いろいろな意味において頂点が少し下降線に入り始めた時期だったのだと思います。その頃のことを以下に紹介します。

AIT は大学院大学で、学部はなく、学生数合計 1000 人、教員数約 150 人だったと思います。大半は修士課程学生で、土木工学を中心に、計算機、農業灌漑、測地学などとともに、文理融合の人間居住、そして経営学がありました。学生も教員もアジアを中心の 20 カ国以上のさまざまな国の出身者です。日本人の学生は何年かに一人という割合でしたが、タイをフィールドとした研究に関心のある学生が日本から留学してきました。教員のほうは、JICA の長期専門家の枠組みで派遣されている教員が 10 名ちょっといました。研究費も JICA から支給されていたので、教員集団の中では大きな勢力でした。

日本をはじめ多くの国が AIT の運営を支えているのですが、方法は 3 つあって、1 つの大学への直接的な資金援助、1 つは学生の奨学金、もうひとつは教員の派遣でした。学生は全寮制でその寮費、生活費、研究活動費そして学費は奨学金で賄われます。成績が 4 点満点の GPA で 2 点を割ると自動的に奨学金支給が打ち切れ退学になります。結果的に学生は必死に勉強します。ちなみに学生の入試選抜は書類審査のみで行われていました。学生寮は単身寮だけでなく、高学年次学生向けの家族寮がある他、教職員寮もあり、キャンパス内に幼稚園の施設もありました。診療所もハーフのゴルフコースもホテルもありました。すべて英語で通じる、ある意味閉じた「村」の様相でした。

講義は午前 8 時から午後 3 時まで、1 コマ 50 分でした。原則週 3 コマ講義をすると 2 単位になります。年間は 3 学期制でした、4 月、8 月、12 月が休暇でした。各学期は 13 週で、7 週目が中間試験、13 週目が期末試験です。修士課程は 5 学期で完了しますが、実際には、最初の 3 学期で集中的に講義や演習をとって、残りの 2 学期で集中的に修士論文作成をがんばっていました。

当時いちばん新しい部局であった経営学研究科は、フランス政府の強力な支援で成り立っていました。教員の派遣のみならず、バンコクのアテネフランセを活用して全学生にフランス語を研修させ、在学中にフランスへのインターンシップを実施し、就職先まで斡旋するという丸抱えに近い運営でした。その根本には、AIT を支援するというより、AIT に投資して、学びに来る学生のためにも、AIT のためにもなるが、自国ももとをとるという強い意志があったのだと思います。他の国々にもその傾向は多かれ少なかれあって、自分の国をどうしたいという意志が、それぞれにあったといえます。

日本政府は当時違う動きをはじめていました。私が赴任して半年くらいして、日本の外務省からの査

察が入りました。外務省職員の仕事の仕方に圧倒されたことを覚えています。事前に資料準備が命じられ、用意した資料については、往路の飛行機で予習を済ませ、到着後は質疑応答が多々あり、さらに、個別面談ということで、当時最年少の私を含め何名かが滞在ホテルにまで呼び出され、それらの議論をもとに報告書の骨子をまとめ、復路の飛行機で報告書原案にまとめ、帰国後には最終確認まで一気に仕上げるというようなものでした。

中身は、タイのチュラロンコン大学やタマサート大学、インドネシアのバンドン工科大学、フィリピンのフィリピン大学、バングラデシュのバングラデシュ工科大学など、工学系の大学院の教育の質が著しく向上している中で、AIT の役割は何なのか、AIT に日本政府が支援することの役割は何なのか、これをたたきつけられていました。各国のそれらの大学を支援すれば、わざわざ AIT を支援しなくてもよいのではないかという問いかけでもありました。当時どれだけディフェンスができていたのか、記憶は曖昧ですが、出自の異なる多くの国の人々が一同に会する大学院教育というオリジナリティ、その教育効果を強調したようにも思います。各国の大学院にて英語による教育プログラムが充実していく中では、必ずしも説得力は強くなかったかもしれません。

日本政府はその後 AIT から手をひいていくことになります。JICA の長期専門家としての多人数の派遣も多額の資金援助もなくなりました。他の国の援助の仕方も変わっていったようで、そのこともあって、現在では、タイ人の学生比率が高くなっています。学部も開設され雰囲気も大きく変わってしまいました。

AIT 在職中にはいろいろなことがあったのですが、日本への学生派遣インターンシップの立上げも思い出深い仕事でした。九州大学および九州芸術工科大学、そして民間会社と福岡市と組んで、日本の夏休みの頃に、AIT の学生を 3 名、福岡市能古島に送り込み、九州の学生 6 名と合宿させ、都市デザイン課題に取り組んでもらい最終日には発表してもらうというものでした。人選から準備から、ビザ取得から、訪日後の共同生活の指導まで、様々な事件が毎日起きの中で、それでも明らかに得るものは大きく、多くの方の協力を得ながら、自分の離職後も含めて 10 年間続けられたと思います。

AIT の同窓会（含む元教員）ネットワークはなかなか強力で、特に現学長はインターネットを活用して精力的にネットワーク強化をしています。最近のバンコクの洪水で、AIT キャンパスも大きな被害にあい、特に図書館は多くの蔵書を失うことになりました。その復旧のための寄附金も多く集まっているようです。

AIT に勤めるまで、タイのことをよく知らず、途上国にかかる都市工学の研究課題のことも知らず、大学運営のことも知らず、日本政府の国際支援のことも知らず、多国籍組織（自分の所属していた人間居住開発学科は 12 カ国の 14 名が教員会議構成メンバー）での振舞い方も知らず、日本の外務省と文部省（当時）の関係も知らず、本当に何にも知らなかったのですが、2 年間を経て、そしてその後のつきあいを経て、多くのことを学んだと思います。

奉仕であり投資であり、出会いと別れであり、交流とぶつかりあいであり、協調であり競争であり、でもその中心には人間教育があり、普遍的な課題がある、そういう粹組みというのは、当時のどちらかというと幼い私にはよくわからなかったと思います。今でもよく理解しているかというと、はなはだ自信のないところではありますが、留学生の多い横浜国立大学にて、AIT を離れてから 21 年後に国際担当の理事を仰せつかったことも何かのご縁だと確信しています。

若者は多くの出会いの中で、時に本人の認識をはるかに超えて成長していきます。教員はその機会と選択肢を適切に用意し、必要に応じて、手を差し伸べ、背中を押すことが仕事なのだと思います。そして教員も成長していくわけです。まずは留学生が明るく有意義に過ごせる教育環境の充実があつて、そこに多くの日本人学生、日本人教職員との出会いや交流が増えていくと思います。これが、今度は日本人学生の海外経験や留学の動機付けになっていければと思います。私などは、研究テーマの特殊性もありますが、留学生と話す中で、発展途上国の都市交通の研究課題の新しいヒントをいただくことが多々あつて、留学生との懇談はとても有意義です。こういうことも含めて、横浜国立大学の日本人学生（含む教職員）の海外への関心、より国際的な視野を持つ人間として成長したいと思う意思、そういったも

のが高まっていけばと思います。ツールとしての語学力、哲学や文化や歴史の学びというものも、そこではとても大切になってくるはずです。こういう土台がしっかりしてくることは、そのまま大学院教育の高度化、それをもとにした海外大学間の研究交流などにもつながっていくと思います。

限られた財源と人員数の中、地域に、そして世界に認められる大学として生き残っていくためには、今の本学の強みをのばし、さらにつなげて、1 + 1 が 3 にも 4 にもなるようにしていく必要があります。

まだまだ具体的な提案を書き出すには至らないのですが、大学全体を見渡してみて、いろいろな可能性があり、それらは、自分にとっては、AIT での経験から学んだいろいろなことにつながっているように思えてなりません。少しずつ、いろいろなことを実験的に実施しながら、戦略立案そして実施への道筋を進んでいきたいと思います。